
僕のはなしを、きいてくれる？ episode001

夏山 僕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のはなしを、きいてくれる？ episode001

【コード】

N9332N

【作者名】

夏山 僕

【あらすじ】

僕に話しかけてくる「僕」の正体は……。

「ねえ、ねえ、オチサン。僕のはなしを、きいてくれる？」

僕は、誰かから話しかけられた気がした。

飯田橋の駅ビルの中にあるコーヒー屋で、スコーンとアイスコーヒーを買って、丸テーブルに座りながら食べていた時のことだった。

声がした方を見ると、そこにはベビーカーに座った生後2〜3か月ぐらいの赤ちゃんがいた。お母さんは、ママ友達との会話に夢中で、周りなんか全然見えてないようだった。

『まさか、この子が？』

僕がそう思うと同時に「そう、僕だよ。」とその子は話した。

話した……。違うかな……。僕の心に語りかけてきた、って感じ。

『僕は、君みたいな赤ちゃんと、話をした事がないから、何をどう話したらいいか、わからないよ。』

「わからなかったらわからないでいいよ。一種のジェネレーションギャップだと思ってくればいいからね。」

難しい言葉を知っているもんだ。普段ママが使ってるのかな。

『聞くよ。話してみて。』

「うん。オチサンは、僕がどこから来たか知ってる？」

『どこから……。？ママのお腹の中かな……。』

「よくわかったネ。そう、ママのお腹の中から72日前に出てきたんだ。オチサンもママのお腹から出てきたんだよね？」

『うん……。』

「じゃあさ、オチサンはママのお腹の中ってどんな感じか、知ってる？」

『お腹の中かぁ……。考えた事ないかも……。』

「そうだよな。みんなそうやって忘れていくんだヨね。ママのお腹の中って、すごく温かくて、すごく静かで、気持ちがいいんだヨ。ホントに覚えてないの？」

『残念ながら、覚えてないよ。』

「あまりにも居心地がいいから、僕はずっとママのお腹にいたいって思ったんだ。それでどうしたと思う？」

『うーん。そうだなぁ……。ええと……。』

「出てくるときに手を両側に突っ張って、出たくないってポーズをしたんだ。そしたらママ、苦しんでた。」

『そつか……。で、苦しんでるママを見て、そろそろ出ようって思ったの？』

「うん。意を決してネ。僕たち赤ちゃんにとって、外の世界に出るっていうのは相当なストレスなんだ。例えば、ずっと水の中に潜ってたら苦しくなるでしょ？そんな感じかな……。」

『それは……。ストレスっていうよりも拷問に近いかもね。』

「そう。赤ちゃんは産まれた時泣くでしょ？あれは外の世界のストレスのためなんだ。でも産まれてきたからには、外の世界で暮らさないといけないからね。徐々に慣れていくしかないんだ。そうそう、僕は最近、顔に息を吹きかけられるのが、やっと平気になってきたんだ。」

『顔に息を吹きかけられるのが嫌なの？』

「嫌じゃないけど、ビックリしちゃうんだ。あとさ、僕たち赤ちゃんって、たまに、勝手に笑顔になったり、勝手に怒った顔になったりするの、知ってる？」

『ああ、見たことあるかも。コロコロ表情が変わったりして……』

「あれはね、思い出してるんだ、色んな事を……。」

『色んな事って……。もしかして前世とか？』

「違うよ。前世なんて覚えてないよ。そもそも前世があるのかどうかも疑問だしネ。」

『そうなんだ……。じゃあ何を思い出してるの？』

「ママのお腹の中にいた時のことだよ。あの時ママ、笑ってたなとか、怒ってたな。とか。それを思い出すんだヨ。赤ちゃんはママのお腹の中にいる時、ママが何を考えてるのか、丸わかりなんだ。」

『なるほどね。大人でも、楽しかった事を思い出して笑ったり、辛かったことを思い出して、悲しくなったりするもんね。』

「うん。」

『じゃあ、僕から質問してもいい？』

「いいよ。」

『今、君が僕に話してくれたことって、いつ頃まで、覚えてるの？』

「それは、僕たちがパパやママたちと喋れるようになる頃には、全部忘れちゃうんだって。友達の子が言ってたよ。」

『そっか……。でも、なんだか赤ちゃんも、大人と同じなんだなって、ちよつと思つたよ。ま、そりゃあそうだよな。おんなじ人間なんだし……。』

「そう。そこなんだ。僕たち子供が言いたいのは……。赤ちゃんだつて、おんなじ人間なんだから、いろいろと押し付けたり、いじめたりしないで欲しいってことなんだ。もちろん僕のママは僕をいじめたりしないけどね……。」

『わかったよ。僕が将来結婚して、子供が出来た時には気をつけるようにするよ。約束するね。』

「大人が、みんなオチサンみたいに物分りが良ければいいのに……。ところでオチサン。オチサンなのにまだ結婚してないの？」

『……。いい相手がいなくてね……。君が大きくなったとき

に、君の友達を……。」

そう思った時に、彼はママにベビーカーごと連れられ、向こうへ行ってしまった。

『あーあ。行ってしまった……。次は誰と妄想で会話しようかな……。』

僕は水滴だらけになってしまったカップを掴み、アイスコーヒーを飲み干して、鼻歌交じりに席を立った。

つづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332n/>

僕のはなしを、きいてくれる？ episode001

2010年10月12日02時16分発行